「グランドスラム」

作者名:外池周平

粗筋:土壌汚染とアスリートたちの無念によって土から生まれた生命体”アース”が人類を襲う中、土との和解を望む研究者と、スーパーアスリートの若者が平和のために戦う話。

1

夏、風が吹いている。想像したことがあるだろうか。空は灰色。
雷がなっている。雲がかかり真っ暗な昼下がり、黒い太陽が顔を見せる中、雷の一閃が街を赤く照らしている。

土から次々に頭をだし、生まれてくる奴らがいる。
山、平原、砂浜など、場所を選ばず、手、頭、胸、と這いずり上がってくる。
暴れた跡。アスファルトの隙間から草のように湧いてくる。どこからでも出てくる。

土を纏った人間のような見た目をしている土人形たちを、俺たちは「アース」と呼んでいる。
彼らは、人間を見つけると暴れ、文明を感知すれば破壊を行う厄介な奴らだ。

日常はどこに消えていってしまったのか。
街のビルも商店街も小学校も、もはや元の形を保つことはできていない。

人は、家にいると壊されてしまうし、地下のシェルターに逃げ込んだとて地下の壁からアースが湧いてきてしまうものだから、海と空に逃げるしかなかった。

投資家たちは、人工衛星に逃げ込み、高みの見物。
地上での”大会”への賭け事を続けているらしい。
食糧などが切れてしまうのはいつなんだろう、早く苦しんで欲しいという思いがある。

海に逃げ込んだ人は、釣竿を持っていったものの、釣れる魚は寄生虫に汚染されているものばかりで、十分な調理器具を持ち込めなかった人たちは次々に倒れていっているらしい。

田畑も侵されているので、地上には十分な食料は残されていない。
ボロボロになったスーパーからお菓子を持ち出して生活を維持している家庭がほとんどだ。

人々は、アースに襲われないように生きるだけで精一杯。道草を食しながら、命をつないでいる。

2

それはいつだって一瞬の出来事だ。
どこから現れたかも知れない砂人形・アースという生き物は、人間と対峙した次の瞬間、一緒にどこかに消えてしまう。
刹那、アースと人間は元の立ち位置に戻ってきている。
アースと人間が対峙するこの光景を目にするたびに、どこに行ったのか気になってしまって周囲に注意が向いてしまうのだが、確かに一瞬いなくなってから戻ってくるのだ。

元に戻った瞬間、必ず人間の方が倒れる。
アースとともに一時的に消えた人間は、極端な疲労状態に陥り、呼吸に必要な筋肉が機能しなくなり、十分な酸素を取り込めないために植物状態になる。

また一人、目の前でアースと人が対峙し、消え、植物状態になる被害を目の当たりにした。
意識を失ってしまったこの人間が、この1ヶ月後に闇競技場で俺のパートナーになる男、佐熊紫音の兄であることなんて知る由もなかったのだ。

佐熊紫音はなんの変哲もない、いや、貧しい家庭の2人兄弟の次男だ。
アースが現れてからは特に、経済的に逼迫する家庭も多く、流通も廃れているので、自分たちで野草を拾い集め、魚を釣り、鳥を捕まえて生きていた。
佐熊家もその例外に漏れず、野草を貪って生きていた。

佐熊紫音の兄、太平が植物状態に陥り、入院を余儀なくされからというものの、とうとう佐熊家の経済状況は限界に達し、紫音は闇社会に参画する決意をする。
勝つことさえできれば、際限なく金銭を得ることができる世界で、奴隷〜アスリート〜として生きていくことを決めたのだ。
もう戻れないことをよくわかった上で、兄の入院費を稼ぐために、勝ち続けなければならない世界に足を踏み入れたのだった。

俺が紫音と出会ったのは闇スポーツ大会アスリートとしてデビューする際の登録会でのことだ。
俺は、直近起きているアースによる死傷者・意識不明者の続出というのが、この闇スポーツ大会に原因があるのではないかと考えていた。
未確認の生命体アースが出現するポイントを整理している際に、事件の中心点がこの競技場にあることがわかってきた。

あの土人形たちがなぜ人間を襲っているのか、見当もついていないが、ここに来れば情報があると考え、エンジニアとして登録会に参加した。

普通、闇スポーツ大会に足を踏み入れる人間は、勝算があるから入り込む。だからほとんどの登録会参加者は、すでにアスリートとエンジニアのコンビで申し込まれることが、多い。一攫千金を目的にしていなかった俺は、そんなことも知らずに登録会に乗り込んでしまったわけだ。

一応、単身で登録会申請したものに対しての救済措置として、マッチングの機会が設けられている。そこで出会ったのが、彼、佐熊紫音だった。
その日、ソロでエンジニア登録したのは俺だけだったし、ソロでアスリート登録を紫音だけだったということらしい。
「マッチング」と言いつつ、余っているもの同士を作業的にくっつける事務局の態度が露骨に見えていて、気分はよくなかった。

初対面の佐熊紫音は、それはもう、身体も華奢で、表情は暗いときた。とっつきづらいったらしようがない。
しかも、この若者は闇スポーツ大会で必須とも言われている皮膚硬化の薬物の使用も拒否した。
「家族に戻って、平和な時間を取り戻すために走るのに、どうして今、覚醒剤的な薬を摂取した上に、将来的に足を失う可能性の高い選択肢を取らないといけないのか」

どうにも頼りない・・・
俺自身は勝つことへのこだわりは無い。しかし、負け続けてしまうと、単純に金を失い生活が危なくなってしまう。
アスリートには最低限、勝てる試合では買ってもらわないと困るということである。
組まされた時はどうなることかと思った。

3

「「On your marks..... Ready... Go!」」
8つのレーンに人間の形をした走者が稲妻の如く駆け抜ける。
駆け出しは上々、誰が勝利するのかも想像がつかない
刹那、もはや1秒経過したタイミングでは、雌雄が決していた。

走者の多くは身体中を甲羅で覆うかのように巨大なマシーンを身につけており、もはや人の形には見えない。大きな未確認飛行物体から、”脚”が生えているかのような形相である。ジェットエンジンの如く後方に火を吹き加速していく。あの”生脚”が、本当にただの脚だったとしたら、焼け爛れて、地面との摩擦で跡形もなくなっているはずだ。
もちろん、あの”脚”はただの脚ではない。選手は皮膚を硬化させる薬物を摂取している。これが勝つためであり、レース中の選手の身の安全を守るための工夫でもある。薬物と兵器がこの大会を支えてきたのだ。
これはもはや人間の競争では無い。ルールもほぼない。他の選手に接触しない、脚で駆けることだけが義務付けられているなんでもありのスピード対決だ。
一方、頭ひとつ抜けて早い一人の”人間”は、古代ギリシャの重装歩兵を彷彿とさせる鎧を身に纏っている。(1)
他の選手は、何か生き物が接触すれば、轢き殺してしまうのではないかという力強い走りを見せているが、この重装歩兵は「速い」。風のように過ぎ去り、重戦車たちを近づけない走りをみせる。
スタート直後の1秒後、彼の勝ちをすでに確信していたが、その時には彼の姿は見えなくなっていた。

勝ち馬である彼、佐熊紫音(さくましおん)。「競技場」で走ることしか許されていない奴隷(アスリート)である。彼が纏っていた鎧の名前は「ホプテリス」。私がエンジニアとして紫音に提供した、競技用拡張身体である。

「競技場」における短距離競技においては、薬物投与を行い強化した身体に、ジェットエンジン搭載の鎧を装備し、限界まで脚を動かすことが通例だ。
前方向に向かう上で無駄のない構造とエンジンの実現、そしてその出力に、ゴールまでの7秒間の間、耐えうる身体を得るための薬物投与が勝利のための肝だった。それが最も速い走り方だと信じられていた。

アスリートが、エンジニアが、速く走ることにこだわり抜くのは、それによって莫大な富を得ることができ、自由の身になることができると信じられているからだ。勝ち馬とそのエンジニアには、相応の報酬がある。だからアスリートは走り、エンジニアは作る。

「競技場」は腐った投資家たちが、賭け事のために金を落とし、愉悦にひたるためだけの空間だ。好きになった、アスリートとエンジニアのバディに対して、癒着し、裏で開発費を送金することもある。

実際には、技術目線では、ジェットエンジンの構造、装甲のフォルムなど、ほぼ最適解が見出され、金があろうとなかろうと、アスリートの身体能力のみで勝負が決まってしまうようなフェーズになっていた。投資家からの金銭がむしろ重みとなり、勝つための手段を選ばず、選手に対して無理な投薬を行ったことで、レース中に植物状態になるアスリートも現れる状態であった。選手を失ったエンジニアは、収入源を失い、その結果、自分がアスリートになるしかないという顛末を見ることになる。

つまり、高性能なマシーンと持続可能な薬物では、差がつかない時代が来ている。
つまり、レースの雌雄を決する、最も大きな要素は、アスリートの身体能力である。
つまり、勝ち馬になるアスリートは、他の選手に比べ、身体能力が高い。
つまり、勝ち馬である佐熊紫音の身体能力は高い。

ちなみに言えば、エンジニアである私は、紫音に薬物投与を行っていない。
ちなみに言えば、紫音の競技用拡張身体には無理なジェットエンジンは搭載していない。
なぜならば、身体能力が高いから。

結果が物語っているわけだが、今の技術で付けられるジェットエンジンを紫音が身に付けたところで、自力で地面を蹴るだけで、ジェットエンジンの加速よりも大きい力に変えてしまう。
彼にホプテリスを纏わせている理由は、隣のレーンの爆風の影響を減らすためと、万が一事故が起きた時に紫音の身を守るために他ならない。最低限、走行時の風圧を抑制するフォルムにしているにすぎない。

4

「現れたか・・・」競技場に一体のアースが現れた。競技場そのものは、随時アースからの襲撃に備える工事をかなり高速に行っていたこともあり、地中から直接襲われることは無い。今回は、競技場の上から、外壁を飛び越えてきた模様である。

砂人形はトラックに入り込み、真っ直ぐに一人の選手のもとにむかっていった。
佐熊紫音。彼に向かって真っ直ぐと、超高速で風を着る姿はどこか既視感がある。
そんなことを考えていると、もう競技後の走り終えた紫音の目の前にアースが張り付いているではないか。
これはいつもの光景だ。次の瞬間、紫音は消えてしまう。
私が声をかける隙も与えてくれず、やはり紫音は消えてしまった。

ああ、また救うことができなかった。
瞬きした次の瞬間に見えている光景は、疲労困憊で呼吸機能を失った植物状態になった紫音の姿に違いない。
あんなに素晴らしい選手、なかなかいないと思っていたのに、、、悲しいことだ。

考えている間は2秒ほどだっただろうか、
確かに、紫音は疲労した状態でゼーハーして座り込んでいるようだ。
意識を残したまま?なぜ目を開けているんだ?助かったのか?
むしろ、紫音の前のアースが倒れている。
風に身体の表面の砂を拐われながら、喜びと苦しみが混ざったような、まさに走り終えた後のアスリートのような笑みを浮かべている。
アースの身体は崩れていき、最後、心臓に当たる部分から結晶のようなものを残して消えていった。

アースを倒したのか。アースを一体倒したということは2度と現れないのか?それともまだまだこれからたくさん現れるのか?疑問は止まらない。
佐熊紫音に聞かなければならない。消えていた一瞬の間に何が起きていたのか問わなければならない。

「坊主、大丈夫か」
「疲れた・・・っ!」
こないだまでそこらへんの貧乏だったくせに、いい顔するようになっているじゃないか。

「坊主、アースと消えている間に何があったんだ？なぜ生きているんだ？あのアースが弱いからか？お前の体に何かあるのか？なぜアースは真っ直ぐお前を狙ったんだ？」
「知らない、よ」紫音はそのまま寝ついた。植物状態になってしまったかと思ったが、普通に呼吸をしている。ただ睡眠に入っているようだった。
こいつの身体を調べる。ちょっとだけなら大丈夫。それとアースが落としていった結晶も気になる。
俺は、アースが落とした結晶と、紫音の身体をかついで、研究所に戻った。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

＃＃＃博士の手記

結論、得られた仮説はこうだった。
アースは、結晶体を核として砂を集めて動くという可能性が高い。
結晶体の中には、人間の体内にあるような必須のアミノ酸が入っており、それでいて闇スポーツ大会でよく使われる皮膚硬化の薬物やドーピングの類のものに近い分子構造の物質の混入が見られる。この崩れ方は、なんらかの放射線の照射を受けた結果として崩壊したものであると考えられる。
そして、あの闇スポーツ大会の会場の地下には、十数年前に一斉に廃炉になったという、原子力発電所からでた、放射性廃棄物をまとめて埋土していたとか。（だからあんな都内の一等地に投資家風情で競技場を建てられるくらいの地価になっているのだと聞いたことがある。。。）

つまり、俺の考えはこうだ。
競技場で奴隷として、薬物投与を受けるも、レースに負けていった人間は、競技場の裏側で最後には処刑され土に埋められる。
人間が持っているタンパク質と、血中に含まれている薬物投与のあと、そして漏れ出している土壌中の放射線の影響が重なった結果、生まれた生命体がアースではないか。

そして、驚いたことは紫音の身体の話だ。
紫音の血液中に、アースの核に含まれている成分と同じ物質が、低い濃度で含まれていた。
このことが、紫音の身体能力の高さやアースが真っ先に紫音を襲ってきたこと、アースと消えた後に生き残っていたことと、関係があるように感じられる。だとすれば、全ての話の辻褄が合うように感じられる。
そもそもなぜ、紫音の血中にアースの核が紛れ込んでいるのかは謎に包まれたままだ。
だが、今回得られた、アースの核の結晶は、アースと戦う上で役に立つに違いない。
開発に努めようではないか。
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

佐熊紫音は病院のベッドにいた。
いつも寝る間も惜しんで、競技に出ない時も爆走で配達して佐熊家を養うための資金を稼いでいる彼が、十一日間も寝ていたのだ、動揺が隠せないのがわかる。
「・・・僕は、生きてたのか・・・」
佐熊紫音は目覚めてすぐ、自分の生を実感する。身体を起こし、自分の手を見つめ、脚を見て、胸に手を当てて、自分の生を実感しようとしているのがみてとれた。
「あんた、いたのか・・・何日経っていたんだ？」
「いたのかとはなんだ！十一日間だよ。入院代は俺が建て替えてるよ」
毎日毎日毎日働いていた紫音は、自分が十一日間も眠っていたことが信じられず動揺している。実際は、きちんと紫音の兄の医療費や自宅への仕送りも振り込まれてなお、潤沢に貯金があったはずだ。あんまりにも追われて生きている彼にはちょうどいい休憩だったのではないかと思う。

「僕、最後、アースと走って・・・」
「走った？」思わず、俺はツッコミを入れてしまう。
「・・・・」
「・・・被害を出さずにアースを土に返したのは、お前が初めてだそうだ。一体、何があったんだ？」
「彼が目の前に現れた瞬間、彼と僕は走り始めていた。今まで一緒に走ったどんな選手よりも速かったんだ、最終的には僕が勝ったよ。レースが終わった後、彼と僕は称えあった。お互いの走りを。」
「いつ、そんなことしてたんだ？」
「見えてなかったんだ。確かに、うたた寝のような、夢のような世界で僕はアースと走っていた。今の競技場よりもちょっと古い感じの建物で走っていたような気がする。僕がその世界に入ったらもう、〝On Your marks〟の号令よりも後の瞬間だったよ。トラックを駆けていたのは、僕と彼だけ。1対1でトラックを使う贅沢なレースははじめてだった。」

何かがおかしい。「佐熊紫音が走る理由」はただ一つ。金だ。
アースに襲われ植物状態化した兄の治療費を払うため、母を養うための金が必要だから走っていたはずだ。
〝称え合う〟だの〝贅沢なレース〟だの、そこに何かを感じる人間ではなかったはずだ。
「僕はアースと走って、直接言葉を交わせなかったけれども、感じたことがある。アースたちは、闇スポーツ大会に出場していた奴隷、アスリートだった人間なんじゃないだろうか。アースと走ったあの空間は、彼の生前の記憶なんじゃないだろうか。と思った。」

「もう一度聞くが、どうやってアースを土に返したのか、教えて欲しい。アースは銃撃でコアを壊しても、戦車で踏み潰しても、別のコアと結合してさらに大きいアースになるという報告を受けている。土に返す手段がないんだ。」
「本当にわからないんだけれども、レースして、僕が勝った。元に戻ってきたら満足そうに土が崩れていって・・・。成仏に近い感覚？」
「何か会話はできなかったのか？」
「砂人形に口はないよ。死人が喋れないのと一緒だよ」

「アースから、日本を守るには、破壊ではなく和解が必要ということか・・・」
紫音がアースと走って、毎度10日間以上眠られてしまっても敵わん。（本人も活動できず働けなくなることを望んでいないだろう・・・）
残りのアースが何体いるかもわからない。作戦を練ろう。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

##博士の手記

紫音との会話から得られた仮説
・アースが人間と対峙した時に人間とともに消える現象、生前の記憶の世界（記憶世界と呼ぶことにする）に引きずり込まれレースを挑まれていた
・記憶世界で、アースを満足させ、成仏させることで土に返すことができる可能性がある
・アースの核が、身体能力を上昇させること・アースを引きつけることに寄与しているならば、武装・ホプテリスに核を仕込むことで対アースの戦いを優位に進めることができるのではないか

紫音との会話で気になった点
・記憶世界でレースを終えた紫音のキャラが変わっていたこと
・紫音はアースとレースする前から、アースの性質を持っていたのか
・アースは生前の人間だった時の記憶を持っているとして、一度粉砕して複数の核が結合した核を持っているアースの記憶世界はどうなっているのか

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

5

日常。
佐熊紫音は今日もトラックを駆け抜ける。
病み上がりということを誰にも気づかせない走りを見せつけ、今日も優勝。
むしろ、以前のアースとの一件以降、さらに早くなっているようにも見える。
客席で頭を抱える投資家やエンジニアたちのブーイングが聞こえる。
確かに、紫音の存在は、スポーツ大会のゲームバランスを崩しているとは思う。
よく思わない金持ちもいるだろう。後ろから狙われてもおかしくない。

「ああ、今日、後ろから発砲されたよ」
今日も佐熊紫音は生きている。なぜ生きているのか。弾丸が見えて、思ったよりも遅くて避けることができたという。彼の体は徐々におかしくなってしまっているのではなかろうか。

最近は考えることが多くなって疲れているので、いったんそのことは無視して紫音に提案する。
「なあ紫音、お前用の新しい、競技用拡張身体を作ったんだ。これからうちの研究所にこないか」
「今日も家に戻って配達業やろうとしていたんだけど」
「お前の身体についての大事な話もある。きてくれ」
「・・・ちぇ、わかったよ」
頑なに働こうとする紫音も、自分の身体の異変は気になっているらしい。
「乗ってけ」
投資家が乗り捨てていったオンボロのランボルギーニに乗せた。

「最近は走るのが楽しいのか？」
紫音を助手席に乗せて、休日のドライブ。こんなことは2度とないだろう。静寂が気まずかったので、なんとなく焦って坊主に質問を投げかけた。

「自分でもよくわからないんだ。この間、目覚めた時は、本気で自分が走ること、スポーツを楽しんでいたことを思い出しながら、喋っていた。。。正直、現実に帰ってきて、家族を養うために走っていたことを思い出したら、走ることの喜びなんてだんだんどうでもよくなってきていて。なんだか、自分、なんのために走っているんだろうって考えるようになってきている。」
紫音は続けた、
「僕は、またアースと走ってみたい、、、アースと走った時の高揚感は本物だった。生きているという感じがした、、、気がする。」

アースが、もしも過去の人間だった時の記憶を持っていて、もしその人間が本当に走るのが好きだったとして、もしも望まない薬物投与、望まないエンジンを積まれて走り、負け、死んでいったとしたら、身体一つで挑んでくれる紫音の存在というのは本当にありがたいものなのかもしれない。
そして、紫音も、スポーツマンとして受け入れられる本当の好敵手と出会えることが嬉しいなんてことがあるのかもしれない。
この金の亡者が、そんなことに目覚めるなんてことがあるなんて。
もしもが重なりすぎている妄言なので、サイエンティストの思考としては赤点だな。

「アースと走った人間は、疲労のあまり呼吸器官の機能が停止して植物状態になる。お前が生きていられたのは、身体が強かったからというだけで、アースと走ることを何度も繰り返していたら植物状態になるぞ」
「それは困る！金が稼げなくなる」
「だから、そうならないように。お前が走り続けられるように考えたものがある。あとそうだ、もう一つ言いたいことがある。お前の身体は・・」
続きを述べようとしたタイミングで、強い衝撃。目の前のコンクリートが砕けちる。道路の舗装が剥がれ、車体にぶつかる。スピードを落とさず、突っ切る決断をするまでに、思考の入り込む余地はなかった。
「アース・・・」紫音の坊主は、目を輝かせていた。自分の命など顧みずに、あれのもとに近づこうと車のドアを開けかかっていた。
「落ち着け！もう目覚められないかもしれないんだぞ！」
「今僕が出なければ、おっさんの命もないぞ！」
「わかった、今は待ってくれ、研究所にある競技用拡張身体”スタディオン”をお前にたくすことができれば、奴らと戦うことを許してやってもいい！だから、そこまで逃げることは許してくれ」俺は、最速のオンボロランボルギーニのエンジンを思い切り踏み込んだ。

アースは続けて紫音を追いかけてきているのかと思っていたが、どうやら俺たちをみていないような感じがする・・・狙いは研究所か・・・

アースとはいえ、人型生物、ランボルギーニのスピードにはついて来られなかったようだ。
無事に研究所に到着した。

「おい、アースをそこまで突き放してしまっては、関係ない人が狙われるんじゃないのか」
紫音をアースと戦わせなかったことで、焦りを感じている。
「いや、俺の考えだとアースの狙いは研究所にある。必ず奴らは追いついてくる。それまでに準備をする必要がある」

――――――――――

「なあ紫音の坊主、お前は自分の身体に起きている異変に気づいているのか？」

「御託はいい！早く鎧を寄越せ」

「いいや、話を聞かせてくれないと上げない」

「け！」

「いつからだ？俺に出会う前から何かがあったんじゃないのか？」

「・・・平和な時は、家族を養おうと公務員になろうって必死に勉強していたさ。そんな悠長なことを言っていられないくらい、ひどい世の中になったよ。・・・アースが現れるようになってから、僕の家庭はその経済的な被害をモロにうけたんだ。母親が女手一人で経営してた定食屋は廃業したよ。そこから道草を食べて生き抜く、その日暮らしの生活が始まった。なんでもないある日、金色に輝いていた道草を口に含んだ。砂の味がしたよ。すぐ吐き出したけど、その次の瞬間、とても身体が軽くなって、『速く走れる！』っていうような気がして走ったら。想像できないほどの速さで走ることができた。これが、初めて僕の体に起きた異変だよ」

「ありがとう。その後からこの間のアースと走った後のように、さらに身体能力が上がるということはあったのか？」

「ないよ、初めてだった。まだ僕は速くなれる。そのことに気づいたんだ。アースと走ることはとても気分がいい。生身の走者と生身の走者のぶつかりあい。偽物じゃない。偽物な世の中にもうんざりなんだ。早く走らせてくれ。」

「お前が家族を、街を守りたいというならば力を貸してやっても良い。この〝スタディオン〟という力をな」

「スタディオン？」

「競技用人間拡張身体〝スタディオン〟、この鎧を身に纏えば、アースたちと戦っても、お前が疲弊せず何度でもアースと走れるようになるかもしれない」

「かも？」

「本当は、今日テストをしたかったんだが、もうこれをアースたちに嗅ぎ付けられた。実験した上で、お前の身体能力の向上を認めてから使わせたかった。」

「身体能力の向上？そんなの、博士と出会った時にいくらか試して無駄だって悟った話だろう？どんなにジェットエンジンを積んだって、僕にとっては重いだけで何にもならないことを知っていただろう？！」

「そんなことはわかっているよ。着てみろ。」

研究所を揺らすほどの轟音が鳴り響く。砂人形たちはもうここまでやってきているようだ。

紫音の坊主に余裕がないことを悟られないように、コーヒーをすすったりはしているが、正直、壁が破られないか心配になってきた。
一応、5㎞くらい先だったら、原子爆弾が落ちてきても爆風で吹き飛ばないし、被曝もしないようになっている、鉛でできた超堅牢・超遮蔽のシェルターなんだが、こんな音で壁を殴られ続けると胃に悪いものだ。

「決めろ坊主。これを着て戦ってみてくれないか」
もともと紫音に与えていた鎧・ホプテリスに、先日倒したアースの核を埋め込んだのが、新型の鎧・スタディオンだ。まだ、紫音の身体がアース化していることは言えなかった。
走れば走るほど、アースに近づいていってしまうのか、わからなかった。
だが、彼は走ることを望んでいる。俺はアースを倒すことができる。
両者に、利益がある決断だ。

後ろでは、土人形たちが、もう一枚先の壁まできている。轟音を鳴らして扉ノックしているではないか。
「あー、もう来ちゃったのか。」

「あなたの目的はなんだ。」紫音が急に核心に迫ってくる。
「今はそんなことは関係ない」俺ははぐらかす。
「僕はアースと走れればそれでいい。お前が僕に力を貸す理由はなんだ?」
金じゃないのかよ!と思うが、いったんそれは置いておこう。言い逃れはできまい。

「和解だよ、土との」
「和解?」
「その通り。アースがどうやって生まれたか知っているか?
地上で扱うのが危うい放射性廃棄物は、本来はガラス固化され、何重もの金属の壁に包まれ安全に地下に埋められるべきだ。これは法律で定められている。だが、その放射性物質が漏れ出していた。ダダ漏れだ。ガラス固化は適切に行われていなかったらしい。いっとき危険地域に登録されたが、すぐに隠蔽された。誤魔化すために、地下に鉛をうめ、一時的にやり過ごす措置がとられ、そのエリアの不動産は超格安で売買された。そのエリアが今の闇スポーツ大会の競技場・都立競技場だ。その危険なエリアの地下に、他で捨てると不味いものを何でも廃棄するようになった。特にアースの出現に関係あるもので言えば。。。処刑された奴隷、アスリートがそこに入るんだ。」
「処刑されたアスリート?」紫音が食いつく
「そうだ。負け続け、アスリートとエンジニアのコンビが費用を支払えなくなった時に、アスリートが消え、エンジニアがアスリートにジョブチェンジしてしまうことが多々あるのは知っているよな。

その時のアスリートはどうなっていると思う。アスリートは処刑されている。棺に納められるでもなく、火葬されるでもなく、死体をそのまま土に埋められるのが慣習になっている。」
「・・・」
「前提の話が長くなったな。生身のまま埋められたアスリートの亡骸にふんだんに含まれている薬物が、放射線物質から放出されたγ線の照射を受けて、何らかの分布で崩壊、それらと人間がもともと持っていたアミノ酸や、その他の化学物質が結合して生まれたのがアースではないかと考えている。奴らは、坊主と出会った時にこそ、アスリートだった時の記憶を再現した記憶世界に人を引き摺り込むが、本能としては土を脅かす人類を滅ぼすということに基づいて行動している。無念のままに競技場を去ったアスリートたちと、自身の清潔を守りたい土の意志が合致した結果生まれた生命体だと考えている。」

「アースたちが攻撃を仕掛けてくるのは、僕たちが土を汚したからなのか」
「俺は土との和解を望んでいる。正直、アスリートの気持ちの方はよくわからん。土の怒りを買いたくない。この美しい地球で生き続けるために、生命を育む土たちと和解の道に進みたい。どうだ、俺の動機はよくわかっただろう。土と和解したい、平和を取り戻したい。」
「僕は、アースと走りたい、だから、鎧を来てやるよ。」

すでに研究室には、隙間から砂埃が舞い込み、光が漏れ出していた。
もうそこに来ている、砂人形が。どうか、これが紫音の最後の競技にならないことを祈っている。

※※※※※※※※※※※※

##博士の手記

ホプテリスの後継機・スタディオン。重装歩兵の鎧の胸部にアースの核を埋め込んだ。
アースの記憶世界に、俺も同行できないか考え、アースの核の破片を自分のスマートフォンに埋め込んでみて、肌身離さず持ってみることにした。
これで同行できるようになるかということには一切根拠はなく、気持ちの問題でやってみた。

※※※※※※※※※※※※

テストなしの、抜き打ちの本番だ。
今までの俺は、エンジニアとして、機械兵器を作る際に、ミスを起こしたことはない。
だが、今回は怖い。仮説に仮説を重ねた結果を、試そうとしているだけだから、真実を引き当てているとは限らない。
この戦闘の後、唯一アースを土に還した実績のある紫音を失ってしまったら、それは人類にとって大きな損失だ。
せめて身体能力が上がるかどうか評価する試験だけでも行いたかった。

「着た！」紫音は威勢よく叫ぶ。見た目はいつもの装備と変わらないのに、アースと走っていいという許可を出しただけで、テンションをあげている。
「おい、僕の身体は何かかわっているのか？」
「何も感じないのか？走ってみてくれ！」
これで何も変わっていなかったら、俺は終わりだ。どっちに転んだとしても、紫音をアースと走らせるしか選択肢がない。

アースが壁をブチ破り目の前に来てしまった。本当に鉛のシェルター壊してしまうのか、と驚いている暇もなかった。サイズがでかい。複数の核を取り込んだアースかもしれない・・・
スタディオンを装備した紫音の目の前に立ちはだかる。
「来た！」

”On Your Marks...!”　鎧が突然声を出す。
瞬きをすると次の瞬間、全く違う景色。都立競技場を思わせる、しかし、真っ赤に染まった競技場の客席に俺は一人ポツンと座っていた。

真っ赤だ。あたり一面・真っ赤。

“get set, GO!!!”　合図と共に、二人のアスリートが走り出した。
俺が知っているレースに比べると、ずいぶん人間が走るのは遅いなと感じた。
いつもみている走りが、スローモーションになって動いている、そんな空間なように思えた。
本当に遅いのか、時間軸が歪んでいるのか、判断がつかなかった。
まあ、生身の人間だったら、全力で走ったってそんなもんだろう。そんなもんだ。

せっかくの競技場だ。コーヒーでも飲みながらでないと、落ち着いて競技も観れやしない。売店にコーヒーでも買いに行こうか。
・・あれ？身体が動かない。。。

ここは、さっきのアースの記憶世界なのか。
そして、俺はオブザーバーだからこの世界に干渉できないっていうところだろうか。
スマートフォンにアースの核を仕込んだら、同じを持っているスタディオンと一緒に記憶世界に来れるかもしれないという、根拠のない仮説はあたったようだ。

しかし、真っ赤だ。何人の記憶が重なり合った結果なんだろうか。トラックは、アクリル絵具で塗りつぶされたみたいになっていて、レーンの境目もわからない、どこがフィールドでどこがトラックかもわからないくらい真っ赤だ。
客席も通路も真っ赤。自分とアスリートだけに色がある。

体感、3秒に一歩ずつアスリートたちが進んでいるような見た目だ、遅い。遅すぎる。
ゾーンに入った紫音の時間軸で動いているのだろうか。それにしても、遅い。
真っ赤すぎるこの空間の不快感は相当なものだ。早く抜け出したいと思った。
決着が早く着いてほしい。

などとため息を着いていたら、いつの間にか、紫音がアースの後ろを走っているではないか。まさか、紫音の坊主が負けることなど、、、？
集中力をとぎすませ、坊主。負けるな、がんばれ。。。！
声にできない叫びを、心の中で代弁していると、スマートフォンが光った。否、スマートフォンに仕込んでいた、前のアースの核のかけらが輝いた。
それに呼応して、紫音の鎧・スタディオンの胸部が光り出したのが遠くから見えた。

それと同時に紫音の走りのピッチが上がった。歩幅は大きく変えないまま、1秒あたりの土を踏む回数が急激に増えた。じわじわとクロノス級アースとの距離を詰めて、追い抜き、そして、レースに勝利した。

何だか、変な気分だ。
競技場では、紫音の勝利が確定していると思っていたから、〝応援する〟なんて感情が、行為が、自分にとって意識されたことがなかった。
エンジニアリングと平和にしか興味がなかった俺が、身近な紫音を図らずも真剣に〝応援〟してみた。
紫音が(アースの核が？)それに応えてくれて、レースに勝った。

悪くない気分だが、何だかくやしい。断じて、俺はアスリートの、紫音のファンなどにはならない。

ーーーーーーー

目が覚めた。ああ、俺の部屋だ。目の前には、立っている紫音と、崩れゆく砂人形が笑みを浮かべているようにも見える。

俺が奴隷、アスリートを、紫音の坊主を、応援するなんて、胸糞悪い。

「おい、今回は意識あるのか？！」と行った途端、例の如く紫音の坊主はフラッと倒れる。

また、息はある。生きている。安堵していると、俺自身も意識が遠のいてきた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

##博士の手記

（白紙）

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

7

「3日だ」坊主が腕を組んで、私に告げる。
つまり、坊主は3日以内に目が覚めたということか。
つまり、実験は成功だ！

「坊主、体調はいいのか？」私はアスリートとしての彼に対してではなく、被実験体としての彼にヒアリングするような気持ちで訊いた。
「うん、僕は生きている、充実している、アースとの戦いの後、2時間後くらいに目が覚めたよ。あ、そうそう、博士の応援も受け取ったよ」
この坊主、もはやスター気分か。核を媒介にしての応援というのが本人にも届くということだな。手記にも記載しておかなければ。

「おっさん、聞いてくれ。東京局からの報道で、アースを武力を以て鎮圧する命令が地域に出ているんだ。」
「何だと！俺が寝ている間に・・・」
報道の内容はこういうことらしい。今までのアースによる被害は、小型アースによる人間への襲撃、建築物の破壊に留まっていたが、最近は大型のアースが現れ、海に逃げ込んだ投資家が海上で襲われるという事件が起きるようになった。
投資家にまで被害が及ぶようになったことで、都としての対応として、アースを無視できなくなったということらしい。
（ある意味、土を汚し、アスリートたちを金で弄んでいた投資家たちが、アスリートたちの魂に葬られるのも悪い気分ではないが）

そこで、都は軍事力を以てこれに対処し、撃破することで、その撃破対象のアースの属性によって、賞金を与えるという声明を出した。
・通常サイズアース、ヘルメス級
・3倍サイズアース、クロノス級
・海上に出現した巨大アース、ポセイドン級
などと定義している。

都は、アースを破壊することで更に巨大なアースが生まれる可能性があるということを認知していないらしい。投資家たちが保身に走り、判断を誤っているものと考えられる。
これでは、都のお偉い方と話しても、方針を変えることがないだろう。

「博士、俺も走ること以外で、アースを破壊しようとする、都の方針には反対だ。アスリートたちの魂への冒涜のように感じられる。どうしたら良いだろうか。」

これも後から聞いたことだが、先日、紫音がレースをした、真っ赤な記憶世界のアースはクロノス級アースだったということで、すでに紫音は潤沢な報酬を得ていたらしい。
そのため、闇スポーツ大会へのエントリーもする必要がなくなり、いったんはアースの討伐に集中してもいいということらしい。
本音は、アースとまた走りたいだけだろうが。。。彼の金の問題が何とかなってよかったとは思っている。

「まず、坊主に話さなければならないことがある。スタディオンでお前の何を強化したか、という話だ。」
「・・・」
「スタディオンは、お前に与えていたホプテリスとほぼ同じ構造のまま胸部にアースの核を埋め込んだ鎧だ。」
「何だと?」と紫音が突っかかってくるが、いったん気にせず続ける。
「伝えた通り、アースのコアというのは、γ線の照射を受けて崩壊している分子だから、それ自体が崩壊してさらなる放射線を発生させる可能性がある。だからスタディオンの胸部パーツは鉛でできている。坊主自身が被曝しないようにするためだ。」と言い放ち続けて、台本を読むかのように喋り続ける。
「じゃあ、どうして、鎧にアースの核を埋めることで、お前の身体能力が上がると思ったかどうがの話をする。坊主の血液には、アースの核が流れている。」
「・・・!」紫音は反応をするが、続けて話を聞くことにしたようだ。
「最初のアースとの戦いで、坊主が寝ている間に血液を採取させてもらって発覚した話だ。勝手に検査したのは申し訳なかった。最初の戦いで坊主を襲ったアースの動き、スタディオンを嗅ぎつけたアースの行動、もしかしたらアースの核同士は引かれ合う性質を持っているのではないかという仮説を持った。これはビンゴだった。アースは、”アースの核を搭載したスタディオンを着た”かつ”アースの成分を持った人間”であった坊主に真っ先に向かってきた。じゃあ、その後の戦いはどうだっただろうか。俺の見立てでは、スタディオンに核を埋め込んでおけば、坊主の血液と共鳴して坊主の身体能力が強化されるものだと思っていた。これは違った。あの赤い競技場の記憶世界では、時間軸の認識が正確にできなかったのだが、坊主のフォームや、ひと蹴りあたりの進む歩幅は、普段のレースとほとんど変わっていなかった。身体能力の向上が観られなかった。その後が、また予想外だったんだ。坊主がアースにリードを許した途端、坊主が負けるかとおもった。だから、俺は心から応援した。”集中しろ、策を練れ”と。心の中でそうした呟きをしたタイミングで、スマートフォンに埋め込んだコアの一部が金色に光をだし、それに呼応するようにスタディオンの胸部と、お前の体が同時に輝きだしたんだ。この”応援”という条件が揃

って、スタディオンと坊主の血液が共鳴し、身体能力の向上に寄与したのではないかと考えている。アースの核が、感情を力に変える媒介になるのではないかと考えた。」
「信じられない。僕の知らないところで勝手にいろいろ試しやがって・・・・俺の血にアースの核が含まれていること、なぜ話さなかった？」
「話そうとしてたら、アースに襲われちゃったんだってばー」

”・・・最新のニュースはこちらです。”
都からの報道によると、2m を超えるサイズの超大型アースが現れたということらしい。
そのアースを”ゼウス級”と呼ぶことにし、最優先で破壊する対象としている。
もう被害にあった人間は 100 人以上で、医療機関の崩壊が目前に迫っているとのこと。
これまでトラックや戦車での体当たり、イージス艦からのミサイル、都の大砲などを用いた殲滅を試みたが、全て効果はなかったという報告がある。

「対策を練ろう」都の対応では、ゼウス級は続けて巨大化するばかりで、抜本的解決に向かわないだろう。坊主と俺で対処しなければ、この戦いは終わらない。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
博士の手記
スタディオンは、ギャラリーの思いを力に変換する装置だ。
ゼウスに対抗するためには、アースの核を媒介にして、人の思いをスタディオンに届ける必要がある・・・

その機能を発現させるためには、記憶世界にアースの核を持った人間を連れていかなければならない。

【アイデア】
・スマートフォンの生産ラインに干渉し、半導体の中身にアースの核を仕込む（だめだ、時間がかかりすぎる）
・闇競技場の入場券の塗料に仕込む（だめだ、闇競技場の観客の連中に素直に紫音を応援しようという奴はいない）
・不特定多数の人間に放射線放出を抑えたアースの核を直接配布する（だめだ、被曝を抑えるにしても一般人に渡すのは危険すぎる）
・・・・
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

8

考えた末に、俺は競技場のアスリートを当たってみることにした。
彼らの鎧にアースの核を搭載しようと試みた。競技場のアスリートたち、結局は金で動いてくれるということを俺たちはよく知っていた。
ゼウスを倒した報奨金を、全て競技場のアスリートたちに還元する約束で、12000人ものアスリートにアースの核を持たせることができた。

先日俺が試したスマートフォンに仕込んだアースの核は、1円玉くらいの大きさで十分だった。
今回12000人に配ったのはさくらんぼの種くらいの大きさのものだ。色も相まってさくらんぼの種にみえる。所有者が被曝しないよう、鉛のコーティングをしてある。
クロノス級アースを倒していこうも、アースとの戦いは続けており、核もかなり集まっていたのでこの数を確保できたということになる。

これで12000人を記憶世界の競技場に送り込めば満席と言わないまでも大盛況の中、紫音とゼウスはレースに望めることだろう。これでゼウスとなってしまった選手たちの生命が静かな気持ちで天に登って行ってくれることを望んでいる。

9

夏の日。昼2時。
ゼウスが現れた。宇宙を制する天空神の名前を冠せられたその黄金のアースは、その名の通り空から現れた。灰色の空の中、輝く太陽を背にシルエットだけ映りだす。
過去の出現報告から、ゼウスがそこに現れることを知っていた。必ず高いところから現れる。旧六本木ヒルズ。
次の瞬間、黄金の砂人形は飛び降りた。トラックで轢いても、戦車で轢いても倒せなかったアース、ビルから飛び降りることを臆せず、平然と自然落下する。
ゼウスの着地地点には紫音が配置されている。俺の算段ではそこで記憶世界に誘導され、決着をつける算段だった。
ゼウスは難なく着地し、そして目の前にいる坊主を確認したようだ。
いつもならスタディオンから〝On Your Marks〟の発声があり、記憶世界に誘導されるはずだった。ゼウスと紫音は、突然、この現実空間で走りだした。向かう先の方角にあるのは都立競技場。

（まさか記憶世界ではなく、現実世界で決着をつけるつもりか。それでも今までと同様に、アースの核を介した応援はスタディオンに届くのか、実験なんかしてないぞ）

オンボロランボルギーニを飛ばして、彼らに追いつこうとする。速すぎてもう見失った。もう紫音は人間ではない。

現実の闇競技場にきたのは久しぶりだが、記憶世界で同じ形状の競技場でレースをしょっちゅう見ていたので懐かしい感じは全くしなかった。
フィールドでは、紫音とゼウス級アースが向かい合っている。紫音は、アスリートとして急成長を遂げて、身体能力は桁違いに上がっているのだが、華奢な見た目は変わっておらず、スタディオンを装備していたとしても、頼りなさは見えすいてしまう。
一方で、ゼウスは巨大。ガタイも良い。胸も厚く、岩のような男だ。現実にこんなガタイの人間がいたとしたら、格闘技の世界チャンピオンであってもこれに喧嘩を売ろうと思わないだろう。
その二人が睨み合って、もう三十分程度たっただろうか。徐々にギャラリーには、アースの核を渡したアスリートたちだけでなく、彼らの専属のエンジニアたちも集い、体感2万人くらい動員された状態になっている。
ここまで来ると、満員に近い見た目になってくる。観客同士のなんでもない会話が重なり合って、かなりの雑音になっている。ここまで盛況な闇競技場は今までなかったことだろう。

紫音とゼウスの睨み合いが終わり、二人はフィールドからトラックの、短距離走のスタート地点に向けて歩みを進めた。
ギャラリーは、静まりかえり、二人の歩く姿を黙々と見つめていた。
これから始まるのは、兵器と兵器のなんでもありのスピード勝負ではない。
これから始まるのは、生身と生身の脚だけで魅せ合うスポーツの祭典だ。

そんなに美しいものではない。空は黒煙に包まれて、人はみんな絶望している。
救いがないと、完全に思考停止した人々が、ただ生きることだけを考えている。
投資家は、賭け事に興じ、空から高みの見物。
貧乏人は、道草を食い、奴隷になり、賞金稼ぎか負ければ死ぬしかないこんな世の中。
こうなったのはアースのせいなんだが、アースを産んでしまったのは人間の汚れであり、夢を叶えられなかったアスリートたちの未練だ。

二人はトラックに差し掛かり、選手両名はスターティングブロックに足をかける。
完全な静寂。物音一つしない。
2万人の観客がいれば、紙袋の雑音、スマートフォンの着信音、椅子の軋む音、雑音が鳴り響いてもおかしくない。
であるにも関わらず、静寂だけがそこにある。

”On Your Marks…”

スタディオンの発声。
吸い寄せられる。時間の流れが止まる。

”get set, GO!!!!!”

始まってしまった。もしも負けたら、俺たち全員死ぬんだろうか。命は取られない？みんな植物状態になるんだろうか。走馬灯のように、今まで記憶が蘇ってくる感覚がある。

自覚を取り戻した。俺は、紫音の坊主とアースのレースを観戦していたのだった。
ギャラリーの様子は一切変わっていない、現実世界か、記憶世界かの判別が全くつかない。
でも一つだけ、違うことがある。
夏空。蒼い空に、白い日差しが矢のように、肌を差すそんな世界。

アスリートたちが夢見ていたのは、こんな舞台だったのか。こんな世界なら、この記憶世界の夢の中にずっといたまま植物状態になってしまってもいいかもな、なんて思ったりもした。

競技場の歓声。百デシベルくらいある。

声を出す。叫ぶ。自分のだしている声が聞こえない。
エンジニアもアスリートも関係ない、ただレースとこの夏の空に向き合っている。
境目がなくなっていく感覚。
いろんなものが溶けていく。

「オリンピック、ね」

10.

夏、風が吹いている。誰が想像したことがあっただろうか。こんなに優しい風が吹くことを。
優しい日差しが肌を焼き、汗が滴る。歓声が鳴り止む。また静寂。
彼は、走りきった。

ゼウスだけではない、いつの間にかギャラリーにも並んでいた砂人形たちは崩れていく。
表情はよくわからないが、微笑み、涙を流しているような雰囲気を感じる。

結局、アースとは競技を通して、汗をかくという体験を共有し、つながった感じはしたものの、
言葉で接点を持つことができなかった。
彼らとの和解は、果たされただろうか。この夏空の下で、生身と生身の競技の祭典に望める」
とが彼らの望みだったのであれば、安心して土に帰っていけるだろうか。

そんなことも、仮説の域を出ない。顔のない砂人形たちが笑っているように見えるのも、俺の思
い違いかもしれない。
彼らはまた襲ってくるかもしれない。ゼウスは幾人の人々の夢だっただろう。一人一人を弔って
やることもできずに、土と和解できたなんて思ったら、笑われてしまうかもしれない。

時間も経過して、アースがこの街には現れなくなってから、街も復興の兆しがあり、以前行われ
ていた商業活動の半分くらいはすでに再開していた。
ゼウス討伐の貢献が都から認められ、俺は新設の環境保全庁の長官補佐として好きに実験や調
査を行う権利と、土の汚染を防ぐように競技場をはじめとした興業施設や、民間企業向けにア
ドバイスを行う職を得た。

都立競技場は、その地下にある放射性物質そのものが危険ということで、立ち入り禁止地域と
なり放射性廃棄物の自然崩壊まで放置されることになった。何かしらの対処をしないと気が済
まない官僚や市民を諫めるのに大変苦労した。

都立競技場以外の地域においても、〝オリンピック〟と称した普段交流しないコミュニティ同士で
スポーツを介した繋がりを深めようという試みが行われるようになった。地域間での商業的な
交渉が行われることも増えたので、経済の回復に一躍買っているイベントの一つになっている。

平和なスポーツ大会が行われている中、佐熊紫音はそれらには参加できないことになっている。

存在そのものが、ドーピングのようになってしまった坊主は、東京にいても仕方がなかったので、旅に出た。世界で、アースと同様に、人間の欲によって夢を叶えられなかった人間の魂を救うための旅に出ている。今頃は大阪にいるみたいだ。

そして俺も大阪に来ている。

「よう坊主。スタディオンの量産ラインを整えた。これで普通の人間とアース化したお前でも、記憶世界上で対等な競技を行うことを実現できるんだ。鍛え抜いた美しい肉体と肉体の祭典にお前も、他の人間と対等な立場で参加できるようになるんだ。どうだ！試してみないか。」

機械によって身体が拡張された世界で、スポーツを精神と精神の戦いに昇華させた。

アスリートたちに幸あれ。

END